フィールドノートの走り書き―⑬（番外編その二）

一月の南三陸町訪問だより

丹羽朋子（にわともこ）

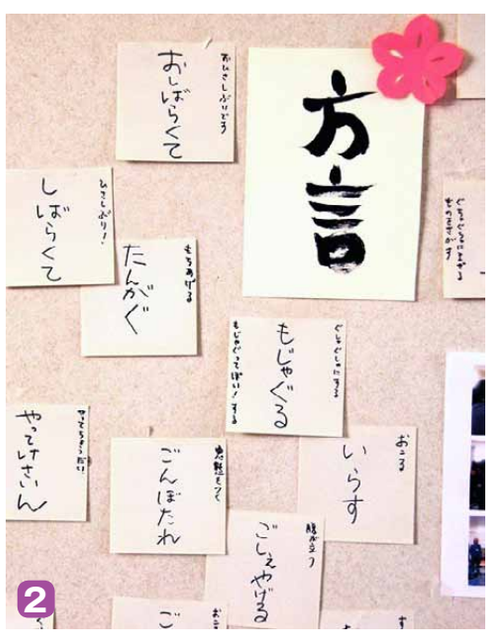
2012年1月下旬、再び宮城県南三陸町を訪れました。今回は、仮設住宅での新たなコミュニティ作りを支援しているNPOコレクティブ・ハウジング社の方々に同行して4つの仮設住宅をまわり、それぞれの集会所で手仕事や郷土料理を作りながら、これからの暮らしを考える活動のお手伝いをしました。

「ここに小さな南三陸町をつくろう」

南三陸町に隣接する登米市にある南方仮設住宅は、300世帯ほどが入居する南三陸町市の最大規模の仮設住宅のひとつ。入居者は甚大な被害を受けた市の海岸沿いの中心部、志津川地域の方々が中心です。前回ご紹介した「きりこ」を作っておられる上山八幡宮の工藤宮司さんご一家もこの仮設住宅の住人です。集会所では宮司さんの娘さんである真由美さんを中心に、女性たちや男性のお年寄りたちが布小物や、紋切り遊び（日本の家紋を切る伝統的な遊び）をつかったコースター作りなどを楽しんでいます（写真1）。

一戸あたりの空間が狭く、被災前は面識のない人々が隣人として暮らす仮設住宅の生活では、みなが集まって交流する場を創ること自体が、孤立する方を出さないだけではなく、今後の復興に向けて率直に話し合う土台づくりのためにもとても重要であると感じます。

みなさんが作った手仕事の品々を拝見しているうちに、こんなお話が耳に入ってきました。「南三陸町の仮設住宅の中で、この南方住宅だけが離れた市外に位置しているため、復興に向けた動向の情報が届きにくく、取り残されたようで不安になる。」「今までと違って海から離れたこの仮設に半年住んでいると、今後、南三陸に戻ってどう暮らしたいのかを想像しにくい。」「狭い仮設ではお正月料理や〈きりこ〉を飾るような気にならない」……。



仮設住宅の集会所の壁に「小さな南三陸」増殖中。

↖1 切り紙はお裁縫が不得意な人も、男性陣もできると人気の（？）紋切り遊び。「みなさんありがとう、みなみさんりく」という手書きの文字が添えられたコースターは、支援を下さった全国の方々のお礼に渡すのだそう。

↑2 “もじゃぐる”は「くしゃくしゃに丸める」、“やってけさいん”は「やってちょうだい」頼むときに使う、“きしゃすね”は「悔しい」…と、表情豊かな言葉がたくさん！

4 他の仮設住宅では、女性たちが集まって、古布を組み合わせて刺し子のコースターづくり。漁師の男たちが酷使する仕事着を幼いころから繕い物してきた奥さんたちは、驚くほど刺す手が早く、布の柄に合わせた自由な刺し子のセンスも抜群。
5 南三陸町の防災センター

そこで急きょ、土地の方言を皮切りに、季節の行事や郷土料理など、かつてあった暮らしを思い出して紙に書いて集会所の壁に貼り、それについてよそ者の私たちに教えるというかたちで、おもいつくままに語ってもらう会を開きました。せっかくなので、前回の訪問の際に撮影した写真もいっしょに壁にコラージュしていきます（写真2）。

「うちの方はその道具は違う言い方で呼ぶ。」

「我が家はそれに味噌は入れないよ。」

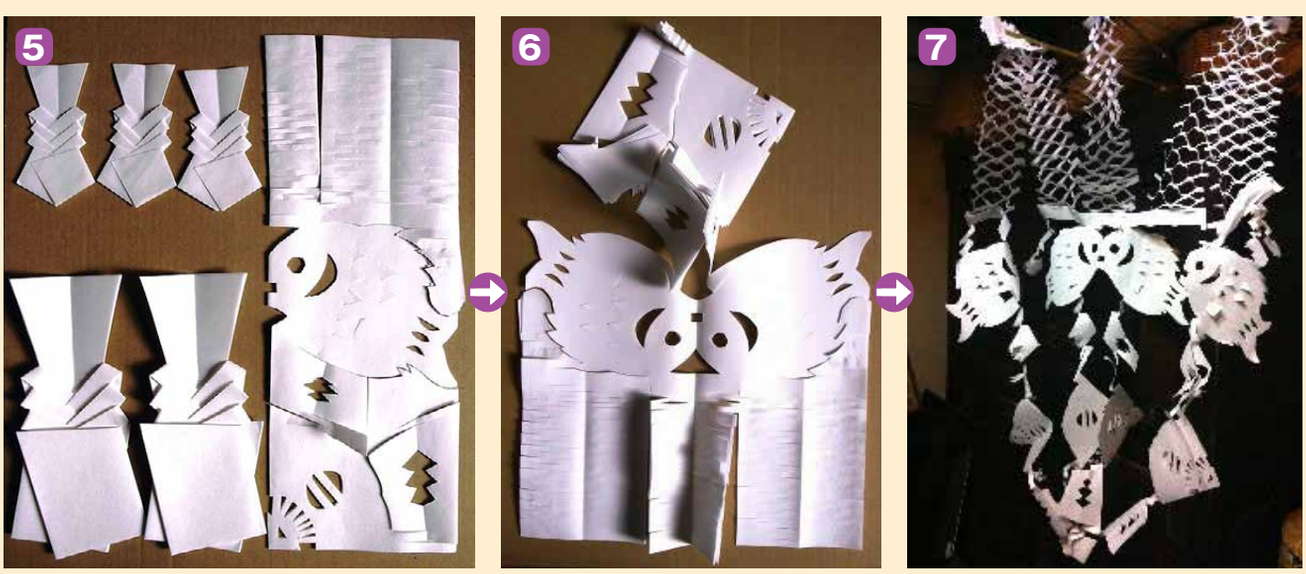
「うちの方のきりこは魚の形はないねぇ、農家が多い山側だから海の方とは違うんだねえ」…

言葉も食べ物も、海と山、元住んでいた場所がちょっと離れると違う。自分の暮らしを思い出すのと同時に、たくさんの地域から寄せ集まった人たちが集うこの仮設住宅だからこそ、南三陸町のなかの多様性がみえてくる。（小さな集落によっては、集落単位で元の居住地のすぐ上の高台の平地の仮設住宅に集団移動したケースもある。）

壁にたくさんの言葉が踊り始めた頃、真由美さんが墨と筆をとって、「南三陸町のくらし」と大きく書き始めました。「ここに少しずつ、この仮設に住む人たちみんなで、ちいさな南三陸町を作っていきたいと思います。」味わい深い題字が掲げられ、皆で壁に作った言葉とイメージの即興コラージュは常設にすることが決まりました。かつての暮らしを思い出して共有する、このささいな楽しみと交流が、住み手たちが徐々に自分たちの未来の暮らしのあり方を考えていくきっかけになることを願って、真由美さんは筆で「では、これから―」と書かれた小見出しをコラージュの右端に貼りつけました（前ページ写真3）。

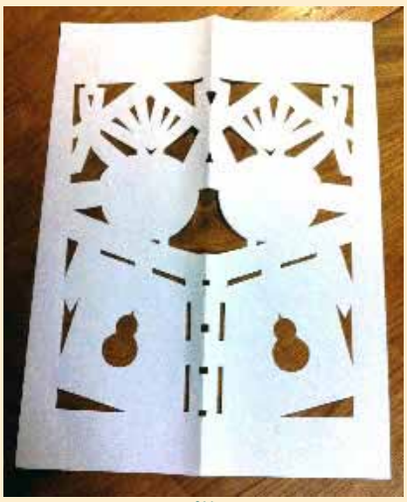
最後は壁に貼られた「食べ物」の言葉のなかから、「た

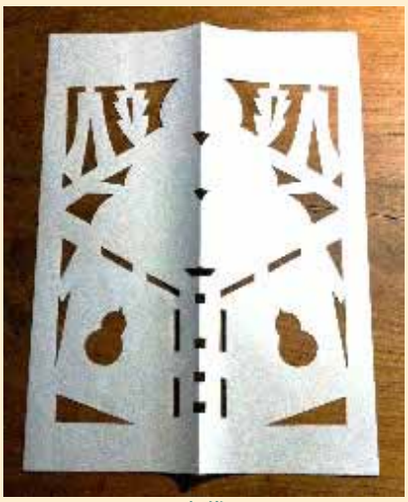
「えびすの幣」組み立て方

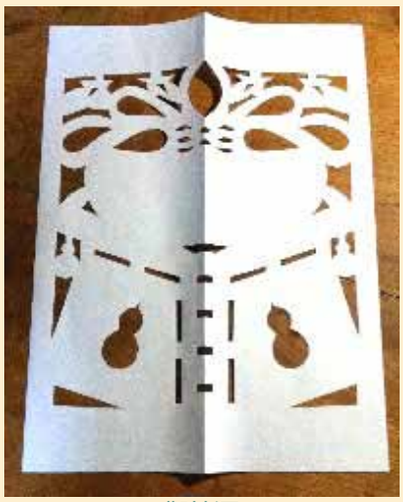


5 4枚に折り畳んで切った本体と、3つの小さな幣束を合わせて組み立てる。（左下の2枚の大きな幣束は別で飾る） 6 組み立て途中。自分で手を動かしてみると、この立体的な切紙の精巧さと仕掛けの見事さに驚く！ 7 3本の竹棒に刺して完成。揺れる影も美しい。

〈切透かし〉


餅


宝袋


御神酒

らす焼ぎ」を選んで皆で作って実食！味噌と砂糖を加えた分厚いクレープのような優しい味のおやつに舌鼓を打ちつつ、思い出話に花が咲きました。これから、この壁に住人達がどのような言葉や写真を貼り加えて、一人一人の“南三陸町”と出会い、創っていくのか――、私自身も引き続き心を寄せていきたいと思います。

季節に応じた様々な行事や祭りによって人々や大地が結びつき、「きりこ」や竈神さまを飾ってヒト以外の存在を受け入れ、豊かな自然と共存してきたこの地域の暮らし方。家も町もかつての形を失ったこの場所が復興するとき、急ぎ足するあまり、どこでも同じような四角い建築物が並ぶ“のっぺらぼう”の町並みにならないことを祈ります。お正月を迎える時期になって初めて、オカザリを飾る場所、郷土色豊かなお料理を作ってみんなで集って食す場所…家にそんな場所があることの大切さに（それが今ないことによって）思い至る。

「震災があったからこそ、自分たちの地域の暮らしの良いところを見直し、それを観光資源にもできるような新しい街づくりができた」という流れに向かうことができたら、とこの地を訪れるたびに思います。

上山八幡宮のオカザリ（きりこ細工）

「昔から雪国の人々は春待つ心をこめて年棚を美しい切紙細工で飾るのをならわしとしてきた。（……）オカザリは、いわば雪に埋もれた暮しが育んだうるわしい民俗の花である。陰鬱な冬ごもりの中で春を待ち望む、せつないほどの思いがそこにはこめられている。天窓からわずかに差し込む光にオカザリの白さがどれほど華やいだ彩りとして映るか、それは気の遠くなるような永い雪国の冬を実際に経験した人でなければわからない美の世界かもしれない」

（熊谷清司『日本の伝承切紙』、1981年より）

宮城や岩手の神社を中心に残る、お正月のオカザリとして飾る切り紙細工（きりこ）は、当初は「法印」（土着の山伏や修験者）の手による摩訶不思議な形＝技巧として崇められ、場所から場所へと移動を常とした修験者たちの収入源でもあったといいます。明治時代の神仏分離の後は、法印が神職や寺の住職となってこの習俗を残し、今でも海の仕事、山の仕事、商家…と地域や氏子に合わせて、多様なかたちのオカザリが作り出されています。

前回の訪問時に取材させていただいた、南三陸町の上山八幡宮のきりこもまた、神職さんが一枚一枚、手作業で切り、組み立てていく素晴らしい切紙細工です。私も組み立てにチャレンジさせていただきました。

◉今回、「きりこをより多くの方に知っていただき、残していきたい」という工藤宮司さんのご好意で、数セットお譲りいただきました。頒布ご希望の方は、丹羽までお問い合わせください。
［連絡先］e-mail：info.yixinshe@gmail.com ☎080-5080-5220

丹羽朋子（にわともこ）
中国の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」を運営。本エッセーのバックナンバーは一芯社のサイト（http://yixinshe-books.jimdo.com/）に掲載中です。